

困った時のあと一歩

人生そこそこ長くやって来て「しめた」と思った時より「困った」と思う時が圧倒的に多かった。私だけでなく大抵の人が同じように感じているそうだから、やはり神様は平等に人間を支配しているのだと考えれば仕方ないことでもあるが、一方「困った」となった場合、諦めないで何かの努力、或いはあがきにも似た対応が運不運、幸不幸を左右する事もあるのではとも考える。悟ったようなことを言えた義理ではないが、私は「困った」と思った時はあと一歩頑張ったりもう少し工夫してみたりする事になっている。

言葉にすれば簡単でもその場では冷静になれない時もあるれば、つい怠けなくなる場合もあるものだが、やはりひと工夫した方が結果は必ず良くなるものと信じている。

学生時代に東海道五十三次を歩いて京都まで帰った時の話だが、静岡を前にして私は高熱を出しフラフラであった。前日の雨に濡れたのが悪かったのか風邪を引いてしまったのである。もうとっぷりと日も暮れて国道を走る車のライトが眩しくて路側を歩くのは危険でさえあった。そんな状態の中、私は旅行を止める事ばかり考えていた。いくら歩いても目的地の静岡駅が見えないのである。

夜の九時になったのを機会に「本当にやめた」とついに言葉に出して言ってしまった私だが、数分間立ち止まって肩で息をしている間も思いリユックは遠慮なく私の体力を消耗させていた。もう思考力もあまり無かった。どうでもよくなっていた。

その時、数百メートル先であろうか赤い信号が見えた。その信号が青に変わるのを見てせめてあの信号まで行って考えようと歩いてみたのが全ての問題解決に繋がる結果となる。

数百メートル先と思っていたが、本当は百メートルもなかったその信号の交差点に到着した私の目に飛び込んできたのは眩しいばかりの静岡駅の照明であった。殆ど静岡駅に到着しているのに気がついていなかったただけなのだ。それにしても駅を見つかるまで何と周りの暗かったことか、今もって不思議でならない。

目的地に到着したことにより、その夜は静岡大学の学生寮にお世話になり風呂にも入った事もあって「明日も又、頑張ろう」と考え直したのは言うまでも無い。その後、旅行を止めようと思った事もなく、無事京都の三条大橋に立ったのはその日から十一日後であった。

この経験がその後の私を変える事になった。放り出したくなる事が起きる度に「いやもう一度」「いやもう少し」と考え直し、あの日見た静岡駅の明るい照明を思い出

すのである。もうダメだと感じた時には案外、問題の答えのすぐ近くまで来ている事が多いものである。深追いしすぎて却って傷を重くするリスクはあるものの、経験的には圧倒的にうまく解決できた確率が高かった。九仞の功を一簣に虧くような事はしたくない。せっかく努力するものは何らかの成果に結び付けたいものである。